

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

Table with 4 rows: 事業所番号 (0170501795), 法人名 (三愛商事株式会社), 事業所名 (グループホーム 里の家平岸 あじさい), 所在地 (札幌市豊平区平岸5条12丁目1番26号), 自己評価作成日 (平成29年5月25日), 評価結果市町村受理日 (平成29年7月3日)

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所では、愛のある暮らしの中で、楽しく生涯を送れることを願いとし信じあえる希望ある福祉を創造し、社会に貢献していくことをモットーにしています。具体的には、ご自宅での生活状況が、入居しても延長したものとるように配慮しながらご自宅に近い環境となるよう努め、支援させて頂いています。馴染みのある家具や道具に囲まれながらの食事作り、畑仕事や地域の交流などで、生活のリズムを通して、忘れていた自分を取り戻し、穏やかに日常が過ごせるよう支援に努めております。また、職員一人ひとりが、利用者様と生活を共にしていることを常に意識し、ゆっくりと関わりをもち、落ち着いた環境の中でコミュニケーションを図っております。

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度の公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先URL: http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/01/index.php?action=kouhyou\_detail\_2016\_02\_2\_kan=true&JigyosyoCd=0170501795-00&PrefCd=01&VersionCd=022

【評価機関概要(評価機関記入)】

Table with 3 rows: 評価機関名 (特定非営利活動法人 福祉サービス評価機構Kネット), 所在地 (札幌市中央区南6条西11丁目1284番地4 高砂サニーハイツ401), 訪問調査日 (平成29年6月19日)

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は地下鉄駅から徒歩5分、交通の便が良い住宅街に位置している。事業所は開設から15年目に入り、利用者が地域で安心して暮らし続けられる基盤を着実に築き上げてきている。グループホーム里の家は、道内に4事業所、12ユニットを展開しており、職員は「里の家理念」に沿ったケアサービスを実現するために、各ユニット毎に毎年目標を掲げ、理念の具現化に努めている。更にきめ細やかなケアサービスに努めたいと、職員は利用者個々に「本日のケア目標」を掲げて、一人ひとりのニーズに応えられる様に取り組むなど、介護の奥深さを実感している様子が伺える。また、月1度の内部研修や管理者合同会議の開催により、全事業所の事故報告やヒヤリハットの事例を共有し、課題解決に向けて取り組み、より質の高いケアを目指す協力体制が築かれている。法人は食事を重要視しており、「食事コンテスト」を企画し、グループ全体で満足出来る調理内容を競う事で、より楽しめる食事を提供出来る様に努力している。利用者も生活場面で参加意欲が高く、食事の準備など家事をする事で、それぞれが得意分野で感性や能力を発揮している。事業所は、本人、家族の意向に沿った、その人らしい最後の時を迎えられる様なターミナルケアにも取り組み、家族との信頼関係を築いている。職員は、コミュニケーションやスキンシップ、笑顔など、利用者とお話する機会として日常生活を大切に、利用者の安らぎや満足感を与えるケアを目指している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

Table with 4 columns: 項目, 取り組みの成果 (該当するものに○印), 項目, 取り組みの成果 (該当するものに○印). Rows 56-62 describe various service outcomes and staff actions.

## 自己評価及び外部評価結果

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員は理念を理解し、日常の中でも理念を解釈した関わりが出来るよう日頃から管理者やリーダーからアドバイスがある。入居者も理念の通り、自由にのびのびと生活できているようで良い表情が伺える。	目指すべきケアサービスと地域密着を謳った法人理念の他に、ユニット毎に目標も掲げ、職員は利用者が地域の中で自分らしく生活出来る様に、日々理念を確認しながらケアに当たっている。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常の中で散歩に出かけ、近所の方と会話したり、地域のお祭り行事や町内会活動に参加し自然に地域に溶け込んでいる。町内会にあるホームとして地域からも大切にされている印象がある。	開設時より地域との交流を大切にし、町内会行事には、利用者、職員が参加している。地域のボランティアや中学生の職業体験訪問も、利用者の楽しみ事になっている。地域に暮らす高齢者を支える取り組みとして「南平岸安心ネット」にも、事業所は参加協力している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	主に運営推進会議を利用し、町内会の方に認知症について、わかりやすく伝えている。実際の事例を参考にし具体的に説明したり支援方法を伝え、地域の方に貢献できるよう努めている。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議出席者も年々増え、活発な意見交換や話し合いができています。家族や町内会の方の意見も多く聞かれ議事録は全職員にも周知されている。地域連携を意識し結びつきが強くなるよう取り組んでいます。	家族、行政、地域関係者に加え、多くの知見者の参加を得て、事業所の運営や地域の状況について話し合い、情報の交換を行い、今後の取り組みに活かしている。時には、参加者が講師となり、知識を得る場にもなっている。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	主に管理者が市町村担当者と連絡を取っている。保護課や包括支援センターなどの担当者とも十分に連携を図り、協力関係を築くことができおり、事業所にとって心強い存在となっている。	管理者は、豊平区のグループホーム連絡会の代表を務めており、他事業所との連携や情報の共有を図ると共に、市の管理者連絡会にも参加し、運営面や業務上の課題について説明や助言を得て、利用者や家族の安心に繋げている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	内部研修で必ず学ぶ機会があり、全職員が概ね内容は理解できている。職員は日常の中でも常に意識して取り組んでいる。玄関の施錠においても入居者が自由に外の空気を吸ったり景色を眺めることが出来るよう、可能な限り施錠しない対応を心掛けている。	職員は、内部・外部の研修にて身体拘束の弊害について学び、声掛けや日々の介護が、行動抑制に繋がっていないか、日常的にチェックしながらケアに取り組んでいる。交通量の多い地域のために、安全に配慮して玄関は施錠する時もあるが、利用者の外出には職員が付き添うなど、自由な暮らしを支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	法人内外でも学ぶ機会は非常に多い。職員は日常のさりげない言葉かけにも、職員間で虐待に繋がってしまわないか確認しあったり話し合いの場を設け、意識して日々取り組んでいる。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内外で権利擁護に関しての研修を受け学ぶ機会が設けられ、職員は参加している。以前、成年後見人制度を利用していた方がおり、今後は更にこれらの制度を利用する方が増えると思われる、職員は理解するよう努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	主に管理者が対応している。面会時に家族から職員に不安や疑問点が尋ねられることもあるため、契約に関して職員も概ね理解し、不安や疑問はその場で解決できるよう努めている。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常の関わりの中で入居者も家族も職員に気軽に話しやすい関係作りに努めている。入居者は家族を通して意見を伝える場面もあり対応できることは迅速に対応し、合同会議や管理者を通し随時反映されている。	利用者の写真が掲載された事業所便りを毎月発行し、更に運営推進会議の議事録も配布している。家族の訪問が多く、管理者やユニットリーダーは出来るだけ話し合いの時間を持つ様に努め、悩みや要望を汲み取り「家族対応記録簿」に記載し、職員間で情報の共有を図りながら、改善に向けて取り組んでいる。来訪が難しい家族には、電話やメールで暮らしぶりを伝えている。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	各職員と面談する機会を設け、意見や提案を聞き取っている。忘年会や観覧会など気軽に話が出来る場面作りや、日常の中でも、職員は常に意見や提案を述べやすい環境にあり、運営に反映されていることが多い。	職員にとって、管理者は良き相談相手となっており、常に率直に話し合える関係性が築かれている。管理者は職員との個人面談でも悩みや要望、提案を聞き取り、気付きやアドバイスをしながら、運営に活かして、働く意欲の向上に努めている。年2回、職員同士の絆を深める機会として食事会を設けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の面談の機会を設け、その職員の希望を汲み取り、働きやすい環境となるようユニット間の移動や、希望休など即時に対応できるものは速やかに要望に沿っている。面談以外にも随時、各自の状況には対応するよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修を受ける機会は増えている。その職員の力量に合った研修を受けることができている。働きながら、ケアの実践方法を日々、学んでいる。他ユニットに行き実践方法を学ぶ機会も定期的に作られている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者や職員は同業者が集まる勉強会や研修の参加の機会を多く持っている。相互訪問の回数も年々増え、ネットワーク作りが進んでいる。サービスの向上に繋がり、入居者の生活の質も上がっていると感じる。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	不安が少しでも取り除けるよう積極的に困りごとや要望を聞き取っている。利用の段階で安心と本人が思える関係ができるような関わりを意識して取り組んでいる。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	特に家族と同居していた場合は家族や近所等との苦労や困りごとは多く、事前に要望等含め話しをしている。話しをしやすい雰囲気作りをし、様々な相談事ができる関係となれるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の話をよく傾聴し、支援内容を検討しその中から、本人の現状とをすり合わせ、支援内容の優先順位を決定している。本人が安心して生活できるような支援内容となっている。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活を共にする中で本人ができることや役割となるようなこと、できることを働きかけ、入居者と職員がお互いに支え合って生活をしていく関係ができるよう取り組んでいる。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時や電話などで家族には細かく近況報告をして、時には相談事もしている。何かあった時には職員だけで解決しようせず家族の意見も傾聴している。共に考えることで介護に携わり、支えていく関係性が築けている。		
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	普段から本人の馴染みの店や場所、人と関われるよう積極的に取り組み、外出行事にも取り入れている。大切にしてきた場所や思い出の場所に気軽に立ち寄れたり、長く関係が続くよう支援している。	家族の了解を得ながら、利用者の地元や元の職場、お稽古事の友人達の訪問を受け交流を図っている。宗教の継続にも支援している。猫好きな利用者や「猫カフェ」に出かけたり、馴染みの店や懐かしい場所にも行事やレクレーションを活用して支援継続に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人の時間を過ごしたいのか、孤立しているのかを見極め、孤立している時は職員が間に入り関りが持てるよう支援している。比較的、関係性は良好で助けあっている場面は多く見られている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も、これまでと変わらない関係性を大切にしている。家族と思い出話をする事も多い。希望がある時は入居や介護のアドバイス、就業など幅広く相談を受けている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の何気ない会話からその方の思いを汲み取れるようコミュニケーションを図っている。そこから得た内容は経過記録に残し職員間で情報共有できるようにしている。	職員は、利用者に寄り添う姿勢を大事にし、関わりの中で意向や希望の把握に努め、特に言葉以外の表情や仕草など、利用者の全体像を見極めた視点を経過記録に記載し、職員間で情報の共有を図り理解を深めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	普段の何気ない会話の中から聞き取ったり、家族やこれまでのサービス利用の担当者からも情報を得ている。知り得た情報は可能な限り実現できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の介護経過記録、バイタル表、受診ノート、申し送りノート等を最大限に活用し、全職員が一人ひとりの現状を簡単に細かく把握できるよう工夫に努めている。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の会話の中から本人の希望を汲み取り、家族等からも話を聞いている。本人に関わる全ての意見を参考にし介護計画を作成し、変化があれば随時、調整し、本人の現状に適したケアを意識して取り組んでいる。	アセスメントとモニタリングを繰り返し、職員間で話し合い、3か月毎に作成した介護計画を基に、職員は更に、毎日新たな目線で利用者を見て確認し、利用者個々に「本日のケア目標」を掲げ、理念に沿った自分らしく自由で楽しい生活が継続出来るケアに取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の経過記録にこまめに記入して情報共有し、これをもとに介護計画を評価し見直している。他にも申し送りノートを活用し職員全員が読んだり、書き込むことができ、迅速に対応や周知ができるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	常に何を優先するべきかを念頭に置き、その時の状況に合わせた対応を心かけている。外出時は職員だけでなく家族の協力も得て実現させることもある。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域にある事業所と連携したりボランティアなどの社会資源を活用し、本人にとって有益となるサービスは柔軟に取り入れている。主に町内会行事などにも参加し閉鎖的にならないよう意識している。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望に沿い、病院は自由に選ぶことができている。職員と家族が協力しながら定期的に受診し、かかりつけ医と連携を図っている。本人も主治医を信頼し受診していることが様子から伺える。	殆どの利用者は、入居時に協力医療機関に変更し、2週に1回の往診を受けている。歯科と皮膚科も協力医の往診を定期的に受けている。他科医療機関への受診は職員が対応し、家族に報告している。週1回の訪問看護師と協力医の24時間連携体制の基に、利用者の安心な暮らしが保たれている。	

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者の体調などを訪問看護師に相談し様々な具体的なアドバイスを得ている。週1回の訪問看護を受けているため、細やかな対応を入居者に行うことができている。速やかな受診にもつながっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを	入院した際は本人が安心できるような病状にもよるが、他入居者と見舞いに訪れることもある。早期に退院できるように、主に管理者が病院関係者と情報交換を行っている。各医療機関とも良好な関係を築くことが出来るよう日頃から努めている。		
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期について、入居者とは時折話し合いを行い、自身の最期について希望を聞いている。早い時期から家族とも話し合いの場を設けるよう努め、協力病院等と連携し、本人や家族が希望する内容を支援できるよう対応している。	事業所は看取りを経験しており、入居時には事業所の方針を説明し同意を得ている。看取りの際には、利用者と家族の希望をすり合わせ、医療機関とも話し合いを重ね連携し、チームケア対応で支援している。職員も看取り体制に合わせて、再度ターミナルケア研修を重ね取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時の対処法はマニュアルがあり、各自が折にふれ目を通すようにしている。ユニット会議でも職員間で特に急変時について定期的に確認を行っている。		
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	自主避難訓練を2～3ヶ月に1度行っている。様々な時間帯や火災以外を想定し訓練している。避難訓練については地域の方に随時報告したり、会議の議題になっている。	火災や自然災害を想定した自主訓練を定期的実施している。昨年8月には、消防署立ち合いで訓練を行い、適切な指導を受けている。非常時用の備蓄品や発電機を確保している。	地域住民の高齢化に伴い、参加協力をお願いするのが難しい現状ではあるが、運営推進会議のメンバーや地域消防団に協力を仰ぐなど、根気よく継続して参加を呼びかける事を期待する。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	年上の方たちということもあり、親しき仲にも礼儀ありという言葉や言葉を念頭に日々、職員は対応している。言葉や表情、仕草などにも気を配り接している。	職員は、利用者との信頼関係を大切に、入浴時やトイレ誘導の際の声掛けや対応などに十分配慮して、利用者のかけがえのない毎日を楽しく過ごせる様に支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いや希望を表に出さず、我慢している方や表に出すことを苦手とする方もいる。その方の思いを汲み取り、自己決定できるような関わりに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ゆっくりとしたペースの方やその日の体調などに職員が合わせるよう意識し、その方の過ごしやすい生活を支援するよう心がけている。希望がある時は情報を共有し、臨機応変に対応できるよう職員は意識している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その方の好みを日頃の会話から把握するようにしている。一緒に買い物に行き、選ぶことに困っている時は、その方の好みの物を職員と一緒に選ぶこともある。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	買い物から調理、後片付けまで全てにおいて個々の能力を生かしてもらい入居者と行っている。献立作りも好みの物を聞いたり、会話の中からメニューを決定するなど楽しみの一つとなっている。	献立はユニット毎に、利用者の嗜好を考慮しながら作成している。身体状況に応じた食事形態にも対応している。利用者も得意分野を活かして、買い物や片付けなど参加している。法人全体で食事コンクールを実施し、食事が楽しいものとなる様に努めている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態や習慣に合わせて提供している。その日の健康状態にも配慮し細かな調整を行っている。好みや嚥下状態など個々の趣向や能力にも配慮している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	その方に合わせた声かけや介助を行い、自身の力で口腔ケアができるよう促している。出来る部分は行ってもらい、仕上げ磨きを職員が行う時もある。言葉の理解が難しい方には非言語で説明している。		
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自立している方に対しても排泄内容の確認を行い、習慣やパターンを把握するよう努めている。個々に合わせて排泄表を活用しながらトイレ誘導を行い、トイレで排泄できる能力を大切にしている。	半数の利用者は、自分の意思でトイレ排泄を行っている。必要に応じて排泄表を利用しながら、さりげなく声掛けし、日中は出来るだけトイレでの排泄を支援している。衛生用品は利用者の状態に合わせて適宜使い分け対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	その方に合わせ、起床時の牛乳や毎日行う廊下の歩行運動など、便秘予防を支援している。便秘がちで自身でも気にして水分や薬に依存的な方にも運動を促している。		
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	行事や受診の兼ね合いもあり、希望に沿えないこともあるが、入浴が出来る日は希望の時間帯や入浴剤を選んでもらったり、仲の良い方同士で入浴できるよう調整している。基本的には毎日、入浴が出来るよう職員は常に準備はしている。	毎日入浴出来る体制を作り、利用者の要望に出来るだけ応える様に、好みの温度調整や入浴剤使用、一番風呂、仲良し二人入浴など、入浴を楽しんで貰える工夫をしている。重度の利用者には3人介助で対応したり、毎日清拭するなど、安全と衛生保持にも努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その方の生活習慣を乱すことなく安心して休むことが出来るよう見守りしている。また、その時の様子を見ながら、場所などの希望も聞き、居室やホールなどの好みの場所で休めるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報や既往歴なども合わせ、薬内容の把握に努めている。薬内容に変更があった場合、全職員が周知できるよう受診ノートや申し送りノートを活用して、変更内容の把握に職員個々が努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴や本人、家族からの情報を共有し、その方に合わせた楽しみを提供している。楽しみの一つとしてビールを提供したり、外食や買い物を行事に限らず日常的に、柔軟に楽しんでもらうことが多い。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	すぐに対応できない時もあるが、可能な限り希望に沿うよう努めている。普段は行けない場所は行事として立案、実施し、遠出や出身地を訪れたり、日常では近隣の公園にピクニックに出掛けている。誕生日は家族とも協力しながら外出の機会を多く持っている。	管理者は、利用者に風や気温で季節を感じてもらえる様に、日々の散歩や買い物は勿論、毎月外出行事を企画し、利用者の要望に応えるなど、閉じこもらせない暮らしを支援している。また、誕生日には家族と外出を楽しみながら絆を深めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出時は職員の見守りのもと支払いをしてもらっている。お釣りを受け取り、レシートと合っているか確かめる方や、所持金から希望の物を買えるか計算する方もおり、個々に合わせた場面作りをしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	面会が比較的多いため、電話や手紙の希望は少ないが、希望があった時にはすぐに対応している。遠くの兄弟からの電話には泣きながら喜んでいた方がいた。		
52	19	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者と協力しながら掃除し清潔を保ち、特に大きな音を出さないよう気を付けている。季節の飾りつけは、入居者の意見を取り入れたり、得意となる作業をしてもらい、皆で作り上げ壁に掲示している。完成した物を見て、皆の共通の話題にもなっていることが多い。	各ユニットのリビングは、広く、ゆったりとしており、壁には利用者と共に作り上げた作品が飾られている。食事を楽しむダイニング空間とテレビ鑑賞や談話を楽しむ応接空間がバランス良く配置され、車椅子での移動もスムーズに行われている。掃除も行き届き、温、湿度調整にも配慮し、観葉植物を飾るなど、温かい雰囲気醸し出している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホール内に何か所かに分けてソファを配置しており、ゆっくりと新聞を読んだり、テレビを見て過ごしている。食堂席では仲の良い同士が生き生きとした表情で賑やかに過ごしていることが多い。		
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していた家具や仏壇をそのまま使用してもらっている。居室内は本人が自由に飾り付けたりもしている。本人が一人の力で出来ない時は、本人と会話しながら居室内の整理等を職員と一緒にやっている。	利用者の意向や家族の協力の下に、使い慣れた家具や生活用品、好みの物を持ち込まれ、趣味のスケッチ絵や手作り作品、家族写真を飾るなど、利用者がそれぞれに自分の部屋を作り上げている。利用者の身体状況によっては、家具の配置を考慮して、安全に過ごせる様に支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	職員の見守りの中、やりがいとなることに安全に取り組めるよう動線上は歩きやすい家具の配置にしている。わかりにくい場所のはのれんや紙を使用し場所がわかるようになっている。		